活動報告3

フォレストスケープ／旭川市

報告者　足立成亮さん

私たちフォレストスケープは、奥山ではなく、里山に重点を置いて、景観・環境整備に努めています。里山の魅力・機能・役割を再評価していこう、というのが私たちの狙いです。活動を通して、山主や地域のモチベーションやコンセプトを引き出して、それにもとづいた森林整備作業を進めていけるよう心がけています。

フォレストスケープは、山主とフリーランスの林業者――僕も「フリーの木こり」を名乗っています――で構成されています。ピンポイントの現場のニーズを実現する方法を探すうち、通常の林業とは異なる、サービス的な山仕事ができないだろうかと試行錯誤しているときに、「多面的」交付金の存在を知り、受け皿として平成26年度、任意団体フォレストスケープを設立しました。

僕個人の理念でもあるのですが、山仕事のプロと、地域と、山主たちがチームになって、それぞれの森づくりを実現させたいと思っています。既存の林業では手の届かないような、細かいところに差し込んでいけるような、新しいスタイルの山仕事を成立させたいのです。

私たちのフィールド

僕たちが現在活動している山林は、旭川市の雨粉エリア、共栄エリア、神華エリア、桜岡エリアの4カ所です。それぞれ2ヘクタール前後の森です。林分構成はカラマツ人工林と、伐採後の二次広葉樹林がメインです。いずれも荒廃して、手入れの遅れも目立ちます。国道や農道のすぐそばに広がる里山なのですが、入林困難な状態です。

雨粉エリアの山主は、70代の女性で、都心部で暮らしておられます。念願の山を手に入れたのは良かったのですが、作業道はあるもののササの侵入がひどくて林内に入りづらい。山菜採りや、野花・動物の観察などのためにもっと近づける山にしたいという希望をお持ちだったため、僕たちのフィールドとして手入れの作業を開始しました。

共栄エリアの山主は、戦後開削で入植し、人生の大半をともにしてきた里山を将来につなげたい、という思いをもっておられます。奥地で辛いこともあったそうですが、いまは森とともにある生活を心から愛している方です。山主のお子さん方はあまり森に関心がないようなので、将来はおそらくナショナル・トラスト型の所有・管理形態をとることになると思います。70歳代の山主による山林管理が今後難しくなったら、次は50代の構成員、さらにその次へと……。僕は30代なんですけど、早いうちに若い仲間を増やしたいよね、というような話をいつも山でしています。この山主の所有林は計100ヘクタールほどもあり、「この全体をこれから100年保たせたい」と熱く語っておられます。

神華エリアでは、とにかく人を大勢集めたいと考えています。ササ刈りをしたり、イベントを開いて、町の人たちだけでなく、周辺の山主たちにも見ていただきたいと思っています。僕たちのこういう活動を見てもらって、里山整備のモチベーションを高めてもらえたらと願っています。

桜岡エリアの山主は、この周辺の起伏のある里山風景に魅力を感じて、10年前に移住してこられた方です。カフェのオーナーでもあり、ご自身のライフスタイルの発信にも熱心に取り組んでおられます。この森を「自分のフィールド」として育てたい、というご希望です。

活動のようすと成果

これらの森で、3年間で通算16ヘクタールほどササ刈りや雑草の侵入防除などを実施しました。ササ刈りの際は木本の実生をなるべく残すように心がけ、その効果が確認されました。効果が分かるとやる気が出ます。よいササ刈り作業ができたと思います。

また「歩き道」を通算約600メートルほど延伸しました。除間伐の面積は約3ヘクタールです。出せる

材は人力・軽トラで搬出し、薪に加工しました。さらに軽車両が入れるような森林作業道を約 370 メートルほど作りました。搬出作業として利用しやすいようにというのはもちろんのこと、加えて周囲の景色に馴染むような道を作りたいと心がけています。

間伐は、どんな森にしたいか、山主のコンセプトに基づいて計画を立てて実施しています。間伐材は 120 立米くらい出しました。 8 ヘクタールの森ですから、結構な量の間伐材が出ます。

交付金事業外ではありますが、間伐木を活用して薪小屋を建て、看板やベンチなどを作りました。たとえばツリーテラスは、間伐材を現地で縦挽きして運んで作りましたが、けっこう楽しい仕事でした。

薪は 100 立米くらい生産できました。そのうち半分は山主さんの自家用にして、「非常に助かった」と好評でした。自家消費以外の薪を販売に回して、新しい森林事業モデルにできないかと検討中です。このほか、薪ストーブ体験、手入れした後の森をスキーで歩くイベント、作業体験イベントなどを開きました。

交付金を活用してチェーンソー、バーカー（皮剥き機）、薪割り機などを購入しました。ツリークライミングサドルは、高所作業に非常に重宝しました。また冬期間の森林調査用にゾンメルスキーを調達しました。デモンストレーション用を兼ねて 1/2 補助で薪ストーブを購入しました。

この 3 年間で、メンバーと山主で立案した当初計画はおおむね実行できました。山主や一般の方に親しみやすい森になり、日常的・現実的な里山との関わりを期待できるフィールドを作ることができたと思います。またこの活動は、地域での僕たちの「仕事」のひとつとなっています。それが何よりの成果ではないかと思っています。

私たちのこれから

いっぽう、こうした概念や思いを、構成メンバー以外の人たちに発信し、共有してもらうことはまだ十分とはいえません。情報発信に努めるほか、地元の方たちとの共同作業の機会を増やす、関心ある人がだれでも参加しやすいようにする、より実際的な研修事業を行なう、といった方向性を考えています。

森林資源と社会の関係性を再構築するには、準備も時間も必要です。しかし、だからこそ、関わる人同士の間のコミュニケ-ションや役割分担が生まれてきますよね。それが仕事につながったりして、結果的にコミュニティが育ち、地域と環境に対する刺激となって良い方向に向かうのではないかと期待しています。森からの発信がコミュニティを育てるのではないか――。そのきっかけとしてこの制度を有効に利用させてもらいながら、活動を続けていきたいと考えています。